

伝統を守りながらも、今までにない可能性を見つけ、次世代に繋げていきたい。



坂本 早苗

専務取締役 / 企画・織柄デザイン・営業



もっと生の声

Q & A

— 思い出に残っているエピソードはありますか？

おかやまマラソンのメダルの紐に真田紐を使いたいとお話を頂いた時のことです。やっと自分で織機が扱えるようになった頃で、納期が2か月くらいしかない上に、15,000mという通常の生産単位を大きく超える長さの注文でしたが、「絶対に織り上げよう」と毎夜遅くまで織機を動かし、織り上げました。それ以来、毎年この仕事を続けさせてもらっています。

— やりがいは何ですか？

江戸時代から続く地元児島の特産品である真田紐を、ここ児島で作り続けること、伝統を守りながら発展させることです。そして、次世代の作り手へと技術を紡いでいくことです。

— 将来繊維業界に従事する人へのメッセージをください。

児島は繊維のまちと言われるとおり、本当に魅力的な素材や製品を作り出す産地です。是非一緒に楽しんでものづくりをしましょう。そして、若い皆さんの感性で倉敷繊維産地の魅力を世界に向けて発信してください。

「真田紐は、古くから焼き物など大切な作品を収める桐箱を結んだり、刀の下げ緒などに使われ、人々の生活の中で、大切なものを守り保護する役割を担ってきたんです。」と真田紐について熱く語る坂本さん。真田紐の生産を受け継ごうと決心しましたが、創業者である先代から反対されたそうです。振り返れば親心だったと思うことも当時は、「自分がやらなければ、真田紐は消えてしまう。」との思いは強く、坂本さんは、反対を押し切り真田紐の製造を始めました。三福織物株の石原社長の指導を受けながら製造を始めましたが、最初の半年間は失敗続きだったそうです。現在では力織機の操作もスタッフに教えられるほどに。「織機と対話しながら織っている時がとても楽しく、真田紐への愛情は深まる一方です。」

「最近では、感染症拡大予防として弊社でもマスクを作りました。生地から縫製まですべての工程を産地内で行うことにこだわり、弊社らしいマスクが完成しました。お客様からも大変好評で、スタッフ皆の励みになっています。」

